「アウグスティヌス『告白録』講義」・著者コメント

二〇〇七・一〇・二七

加藤信朗

（注）このコメントは「書評会」の当日、三人の先生方のお話のあとに、著者からの最初の応答として述べさせていただいたものです。図示した部分を、その場で言葉を添えて説明したので、この言葉による説明の最初の部分だけを文字にしてここに付記させていただきます。

〔I〕 **signum と res**

――これは、わたしがアウグスティヌスの『告白録』に関わっていた間に、わたしの内に熟成してきた「事柄そのものとの関わり」を図示しようとしている。それは同時にそこでわたしの内に熟成してきた「哲学の構造」でもある。

わたしたちは「しるし」のうちに「生きている」。「しるし」はいちばん身近には「ことば」として語られ、目にし、耳から入ってくる。「しるし」はそれぞれ或る一つの「こと（事）」をあらわしている。「しるし」によってあらわされた「こと（事）」にはそれぞれ或る一定の固有の特徴が備わっている。それを「ことがら」という。「ことがら」は「こと（事）」に備わる「がら（柄）」である。「風が流れている」というとき、「風」、「流れる」という「こと（事）」にはそれぞれ固有の特徴、「ことがら（事柄）」がそ

なわっており、それにより「風が流れている」という「ことば」が耳に入ってくるとき、わたしたちはその「ことば」（＝文）が述べあらわしている「ことがら（事柄）」に「ひたされる」。

(i) それが、まず、わたしたちの「生きている」ことの「あるがまま」である。この「あるがまま」を「ま・こと」（真・事＝まこと・vera, *alethe*〔neuter, plural〕）という。

(ii) ここにわたしが「日本語」であらわした「ことがら（事柄）」は、さしあたり、日本語の内に生きているわたしたちの「あるがまま」である。この「日本語」の力をわたしは大切にしている。それは「やまとことば」と「漢字」の両様でところどころ表記されているが、それがまたこの「日本語」の「ちから」をなすとわたしは常々考えている。

(iii) そして、これはアウグスティヌスが signum と res という「ことば」で関わっていた「こと」にかなり近いものだと、わたしは思っている（近代ヨーロッパ哲学の概念機構、さらに、これを写そうとした「拙劣極まる」日本語訳語を介して、その「あるがまま」に近づくことはとても難しいと知るべきである）。それはアウグスティヌスが grammatica として、さらに rhetorica として初等・中等学校以来、骨身に沁みて身につけてきた「ことがら」であり、さらに『告白録』では dialectica を駆使することによって、「ことがら」そのものの「まこと」に近づこうとしている。Henri Marrou が「Orateur Chrétien の熟成」とアウグスティヌスの「教養（*paideia*）」を特徴づけるのは、それゆえ、「ただしい」と考える。『告白録』とはまさにそのことの「現成（＝熟成）」（*energeia*）の「範型（exemplum）」である。

――冒頭の数行に図示したことについてその場で述べた説明をなぞろうとして、そのときより遥かに沢山のことを記してしまったかもしれない。でも、それも「著者のコメント」としてお許しいただけるかと思う。その後に記したこともそのようにご理解いただければ幸いである。

（二〇〇八・一一・三　加藤信朗記）

〔I〕 **signum と res**

signum　　res
　　（ものごと）
しるし　　こと　　――（その）こと　　まこと
　　ことがら（事柄）　　vera - veritas
　　ことば（言葉）　　*aletheia - aletheia*

（自己が）関わっていること　――（自己に）関わってきていること

しるし　から　ことば　を通じて
　　ことがら　を通じて
　　――→　こと
　　（その）こと　へ　　みち（途・道）
　　ことわり（わけ）を通じて
　　――→　まこと　へ　　（『告白録』）
　　［あるがまま（のこと）］
　　さがすこと　（quaerere）

たずねること
（探究）　——　（dialectica の途）

- - - - - - - - - - - - - - - - - -

記憶（memoria）
（心の奥底にしるされていること）
「覚えていることとして」
「忘れられないこととして」

わたし
（生きていること）
（いのち）

光の直視・斥けられてあること（VII,x,16）pp.172〜178

uidi qualicumque oculo animae meae supra eundem oculum animae meae, supra mentem meam lucem inconmutabilem….

et cum te primum cognoui, tu assumsisti me, ut uiderem esse quod uiderem, et nondum esse qui uiderem.

et reuerberasti infirmitatem aspectus mei radians in me uehementer, et contremui amore at horrore: et inueni longe me esse a te in regione dissimilitudinis

光を見た —— 光によって斥けられた
（同時根源体験）

et clamasti de longinquo: immo uero ego sum qui sum. et audiui, sicut auditur in corde, et non erat prorsum, unde dubitarem faciliusque dubitarem uiuere me quam non esse ueritatem

「わたしはある」(ego sum qui sum- *'ehyeh*) という声が心の奥底で聞かれる

「真理があること」を疑うよりも、「わたしが生きていること」を疑う

「わたしはある」(ego sum qui sum- *'ehyeh*)

「庭園の場」の tolle, lege の場(=「主イエス・キリストを着よ induite dominum Iesum Christum」(VIII, xii, 28-29) における「激しい涙の雨(ingentem imbrem lacrimarum)」、「安心の光(lux securitatis)」についても同じことがある。(pp.216-217)

「心の奥底に忘れられないもの」として記されていることにある「かかわり」

「わたし」(自己=いきていること)——「わたしはある」(*ehyeh*)

「あるがまま」=「まこと(uera, *alethe*)」

この「心の奥底における忘れられない記憶」を、いま、「自己」と「人」と「真理」の前で「表白」すること、「証言」すること、それが confiteri(告白する)ということである。

冒頭箇所で「あなた」といわれていて、「神」という言葉が出てこないのは、その箇所はこの関わりを述べる箇所だからである。

——これは荒井先生への応答になるだろうか。

IIからIXに述べられる「記憶」の一こま、一こまは、これを中心にして、それに関わる限りの「関わり」の仔細が表白されている。

したがって、それは「あなたはあなたの言葉でわたしの心の奥底を刺し貫かれました。それで、わたしはあなたを愛してしまいました。(percussisti cor meum uerbo tuo et amaui te. X, vi, 8)」という「愛の告白」を基盤にして、そこから「自己」と「人」と「真理」の前で「あるがまま」(=真理)を「表白」すること、「証言」することであり、「真理を行なう(veritatem facere X, i, 1)」とい

う caritas（dilectio）（X, iii, 4）の行いである。それが「『告白録』を書くということ」である。（pp.265-269; 269-274）

――これは水落先生への応答になるだろうか。（ことにpp.269-274）

〔II〕 記憶論の場所（第10巻）

記憶（memoria）

覚えていること ―― 覚えていないこと（＝忘れていること）

「忘却の記憶」は表層的には矛盾である。

表層記憶 ―― 深層記憶 と構造化すれば解決できる

「内性（interioitas）」の重層性

――「記憶の広野」、「記憶の宮殿」（Xviii, 12）

内化の端緒（外から内への帰向はどのようにして起こるか）（pp.288-315）

「わたしの神」（deus meus）は何処にあるのか。

「外」、自分を取り巻く世界に尋ねる。「大地」「海」「空」。彼らは「自分たちはあなたの神ではない」と答える。では、わたしの神についていってくれと求める。「その方がわたしたちを作った（ipse fecit nos.）」（X, vi, 9）

interrogatio mea intentio mea, et responsio eorum species eorum（ibid.）

species を「すがた」と訳すこと（水落氏）に賛成

「かたち」「すがた」は「一つのもの」である。ここにはプラトン派に学んでいるところがあると思う。

第七巻の問題、VII, x, 16 Et inde admonitus redire ad memet ipsum intraui in intima mea duce te et potui.

ここは悪の存在の問題だった。それが彼をマニ教に引き留めていた。善である創造主が何故、悪を作ったのか。善悪二元を認めるマニ教の合理性が彼を引きとめていた。

Plotinos の哲学は「一」、「理性」、「魂」の自体存在性を認めた。存在するものはなんらか「一」を分有する限りで存在する。その限りで、それらは「よいもの」（＝完全性を備えたもの）であり、「美しいもの」である。それが「形」であり、「姿」である、悪とは、これらの「存在」が

その「完全性」、「一性」を失うところにある。それゆえ、悪は「善の欠如」としてだけ生ずるものである。

世界内の存在事物が「秩序付けられており、一性を保つものである」限り、存在する。それは「かたち」であり、「すがた」である。それは「美しいもの」である。

「秩序」「一性」「完全性」「美」がプラトン哲学における存在の原理である。

――それらは「理性」の対象である。inde admonitus redire ad memet ipsum という「自己還帰」への奨めは、こうして「理性」への還帰の奨めである。それゆえ、第七巻の問題はこの「理性」の原理である「一そのもの」、一切のものを根拠付ける「光」そのものの直視に向かい、そこから撥ね退けられるという「挫折」の経験になっている。その挫折を癒したものが「謙遜」であり、「イエス・キリストを着ることだった」というのが、第七巻と第八巻で語られている「回心」の体験だったというのが、本書で展開したわたしの読み筋でした。つまり、第七巻を知性の回心、第八巻を意志の回心というように切り離さないでひとつの回心がそこで述べられていると読むことです。

そこで、「一性」「完全性」「秩序性」「美」が「存在」の秩序になります。「かたち」「すがた」とはそれを具現しているものなのです。「一つでないもの」は「形」をなさないのです。「形」が「存在」の「きまり」です。それが「美(*kalon*)」です。

「多」から「一」への還帰の端緒がそこにあります。(それはプラトン哲学の出発点です。『パイドロス』篇参照。)

それは同時に「外」から「内」への還帰です。「そと」は多なるものに出会うところであり、「うち」が「一」のすむところ、「一なるもの」に出会うところだからです。

――これが何故なのか、すこし分かりにくいことです。でも、それがわたしたち「人間」の現実です。

――これは「記憶」と深い関係があるところであると思います。「記憶」とは「一なる自己」が関わっているものだからです。記憶がまったく「ばらばらな多」であるとき、「自己」は分裂します。「統合失調症」と最近言われているようですが、「分裂症」といわれていたものです。

「美」はそこでもっとも「深層の自己」のかかわるもの、あるいは、「もっとも深層で自己が関わるもの」、あるいは、「自己に関わってくるもの」です。

――久米先生におうかがいしたいのは、リクールの記憶

論で「美」はどういう位置を持つのでしょうかということです。

（アウグスティヌスにとっては根本的であり、それはギリシャ教父でも根本的であったようです）

「あなたの神がわたしたちを作った」という叫びによって、自己へとたち返され、et direxi me ad me et dixi mihi : tu quis es? et respondi: homo. et ecce corpus et anima in me mihi praesto sunt, unum exterius et alterum interius.（X, vi, 9）と続き、記憶論へと移ってゆきます。この部分は「人間論」と呼んでよい部分ですが、これについては本書 pp.309-315 を参照。

「神」（deus）という一般名もここで出てきうる。しかし、『告白録』では、基本的には「わたしの神（deus meus）」が表面にある。

そこで、最初の話に戻ります。「しるし」と「こと」または「ことがら」を結ぶところに、「かたち」「すがた」というものがあるのではないかということです。

「こと」「ことがら」とは、わたしたちが生きていることにおいて「関わること」または、わたしたちが生きていることにおいて、「わたしたちに関わってくること」だといってよいのですが、それは、より近いものとしては、「かたち」「すがた」として関わってくるのではないでしょうか。わたしたちが「覚えていること」「忘れられないこと」とは、ある「すがた」「かたち」ではないでしょうか。

そこで、「こと」は目に見えないものですが、「かたち」「すがた」は目に見えないものかも知れないけれども、「こころの目」には見えるもの、はっきりと映って消し去ることのできないものではないでしょうか。それが「記憶の広野」をなし、幾重にも重なっているのではないでしょうか。「想像の目」というと余りにも力ないものになります。

リクールはまったく勉強していないので何もいえないのですが、先日、久米先生の訳書によって Bergson の *Matière et Mémoire*（『物質と記憶』）が重要なものだと学び、田島節夫先生の翻訳（白水社刊、一九九九）のはじめを開いたところで、第七版の序文に、イマージュのことが大きく取り上げられていて、とても素晴らしいとおもいました。このイマージュは「かたち」「すがた」に関わるものに違いないと思うのです。つまり、「もの」と「ここ

ろ」の中間にあって、二つを結ぶものであるように思うのです。アウグスティヌスはこのイマージュの内に生きていたのであって、『告白録』とはそれを書いているのではないでしょうか。つまり、かれのイマージュとして「消え去りえないもの」を書いているのではないでしょうか。

image - 「心象」、「形象」、「かたち」、「すがた」

――これも『告白録』は「何を書いたのか」という水落先生のご質問へのお答えになりますでしょうか。

『告白録』を自伝として読まないという本書の意図もそこにある。

では、そういうものとして心の奥底に残る最大のものは何であろうか。それは言うまでもなく、母モニカの面影であり、生であり、とりわけ、その「祈り」である。

「母の夢（木製の定規）」（III, xi, 19）

「涙の子が失われることはない（fieri non potest, ut filius istarum lacrimarum pereat. III,xii,21）

オスティアでの母モニカとの最期のひと時を語る第九巻がなによりも感動的なのはそのゆえである。死の場面、母の死の悲しさを我慢できず、風呂に入ってもいやされず、ひとりになって思いきり泣き、母のために祈ること（IX, xii, 33-xii, 37）が第九巻の末尾をなしている。思いきり涙を流すことによって、彼には新しい日々が始まっていたのではないだろうか。それは、今、司教として、会衆に向かっている彼の生活の始まりなのだ。

転換点を Hortensius 体験としないのは、それはかれにとってマニ教に深入りするためのきっかけになっているからである。もちろん、Faustus 体験とそれを一連のものと見てもよいのではあるが。

名前を挙げていないが、若く死んだ友人の思い出は大きい。そして、おそらく長く生を共にした女性の記憶も新しいに違いない。

また、回心のきっかけとなる Simplicianus（VIII,i,1）のこと

そして、生涯の友、Alypius。

名前を挙げていないが、婚約したままで結婚をしないままで終わった少女だったひとのことは苦しい思い出、忘れられない苦しい思い出なのではないだろうか。

こうして記憶が主として人とのかかわりにおいて残るものであるのは間違いない。

イマージュの束として『告白録』を見るときに脳裏に浮かび上がるものはそういうものだが、おそらく、それが、『告白録』なのだろうと思う。（そして、その間にあって語られないイマージュの数々）

〔Ⅲ〕「忘却の記憶」のアポリアについて

忘れているものを思い出すこと

失われているものをみつけだすこと

「忘却の記憶」のアポリア（X, xvi, 24）

忘れているものは覚えていない（記憶していない）

⟶ 覚えていないことを思いだすことはできない。

もし、思い出したとしても、それが忘れていたものだとどうして認知できるのか。

「探究のアポリア」（プラトン『メノン』篇）との類似

知らないものを探究することはできない。

探究すべき対象を知らないなら、何を探究するか分からないから。

知っているなら、探究する必要はない。

もし、探究して見出したとしても、それが知らなかったものだとどうして認知できるのか。

『告白録』では、このアポリアは、「幸福の願望」・「誤謬の可能性」・「誤謬の願望の否定」という「論理（*logismos*・ratiocinatio）で説き明かされている。

〔Ⅵ〕 補足・集団的忘却について

（*Le syndrome de Vichy de 1944 à nos Jours*, Henry Rousso, 1987 cf. Ricoeur, *La Mémoir, L'Histoire*, 2000, pp.581sqq. 久米訳 pp.242-243）

cf. *De Civitate Dei*; Imperium Romanum, Pax Romana

戦後日本　敗戦　―　終戦　マッカーサー体制・玉音放送（大日本帝国の影の部分の遮蔽）

Erna Paris, *Long Shadows, Truth, Lies and History*, Paris, 2000

（『歴史の影―恥辱と贖罪の場所で』、社会評論社、二〇〇四）

〔Ⅴ〕「書かれたもの（scripturae）」について

signum　　res

scripturae

という構造が大切になる。